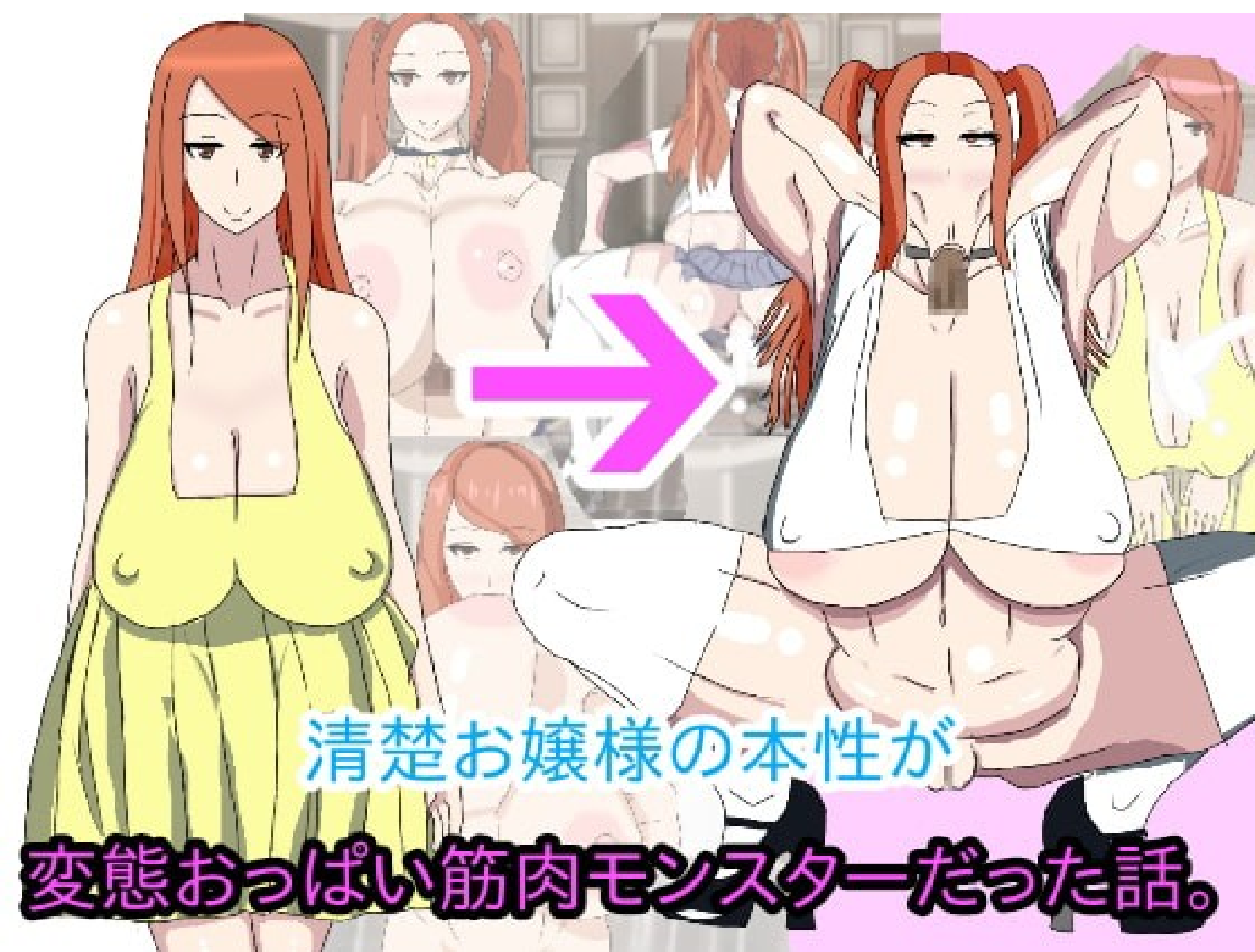




清楚お嬢様の本性が

変態おっぱい筋肉モンスターだった話。

『午前7時20分頃、屋敷内にて、高貴なスーツ姿の老人がテーブルに皿を並べていた。老年であるにも関わらず、その姿は凛としていて、気品があり、紳士的でもあった。』

アルフレッド「さて、これでお食事の準備も整いましたか……」

『老年の男はため息をついた』

アルフレッド「やれやれ、最近体の衰えを感じますな……お嬢様がお産まれになる前は、まだまだこれからだと思っていたのに……。いやはや、歳は取りたくないものですな……」

アルフレッド「いかにいかに、まだまだ仕事は残っている。ぼさつとしてる場合ではありませんな。さて次は……」

エラ「アルフレッド〜!」

むにゅ



アルフレッド「なっ!?! お、お嬢様!?!」



エラ「おはよう〜!!」

アルフレッド「おはようございます、エラお嬢様。
しかしながら私、困ります。貴方のような高貴なお方は
私のような者に慣れ親しくしてはいけないのです。」



どっぴゅん

エラ「いいわよそんなの。私が抱きつきたかったから
抱きついたのよ。」

アルフレッド「ですが…。」

エラ「ふふふふっ♡」

アルフレッド「そう、最近お嬢様は私へのスキンシップが
著しいのです…。」



アルフレッド『今から一週間前の事です…。』

エラ「見て見て〜アルフレッド〜！私、セルフ乳首舐めが出来ましたわ〜♡」

アルフレッド「なっ！？ いけません！お嬢様！そんな破廉恥な事をされては…！」



エラ「そんな事言っ〜アルフレッド、私の雌牛みたいなおっぱい好きなんでしょ？吸っていいのよ〜！」

アルフレッド「そう申されましても…。」

アルフレッド『あの日の晩、お嬢様がお休みになられた後、私はお嬢様のセルフ乳首舐めのお姿を思い出しながら、2回自慰行為を行ってしまいました…』

アルフレッド『執事でありながら性欲を抑える事が出来ませんでした…』



アルフレッド『人生を懸けた執事としての尊厳を捨ててまでも自慰行為に走るほど、お嬢様のおっぱいは魅力的だったのです…』

アルフレッド『欲を言えばあの場でお嬢様にぶっつけたかったですな…』

エラ「どうしたの？アルフレッド？ぼーっとして。」

アルフレッド「い、いえ……！何でもありません。お気に
なさらずに……！」

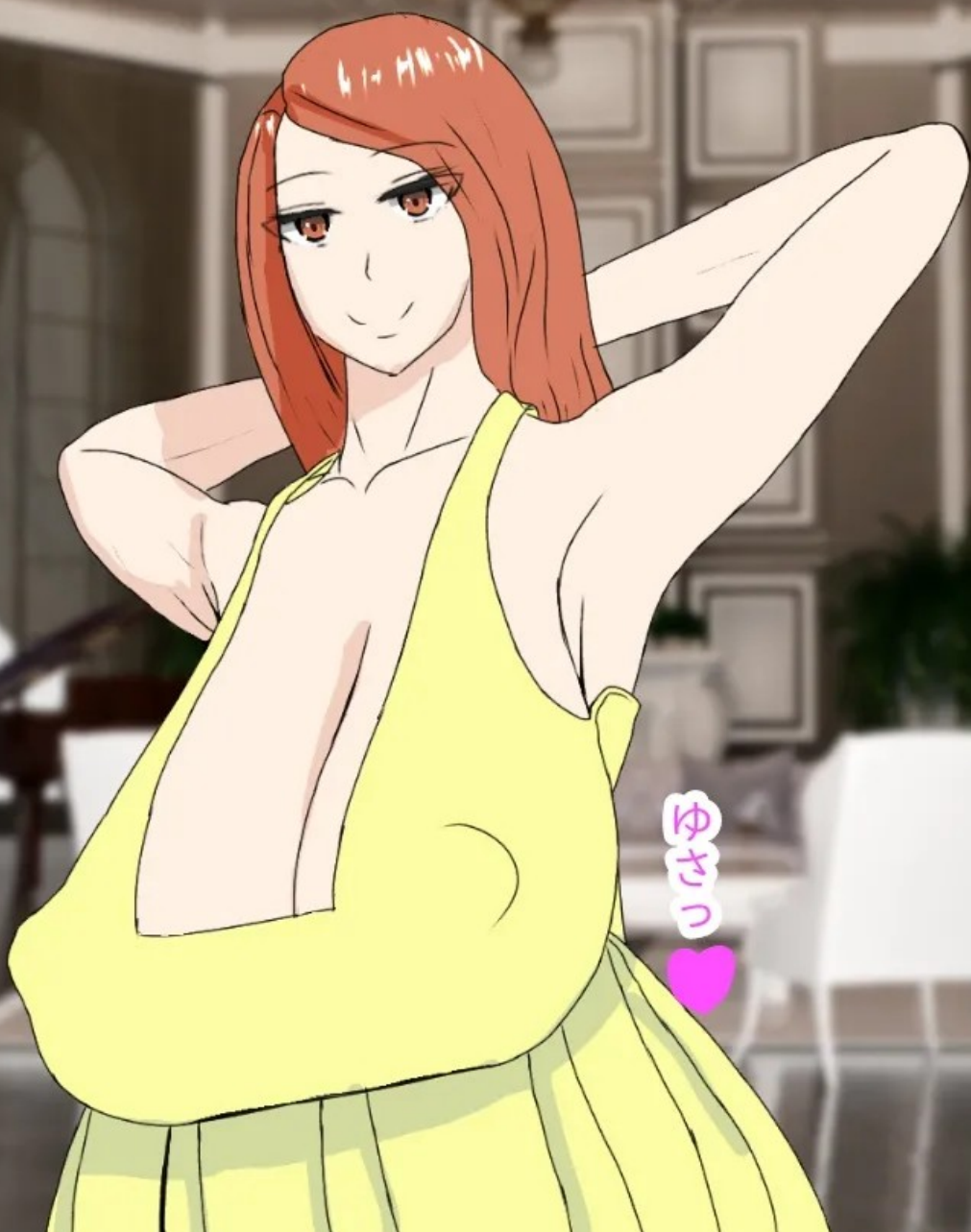
エラ「そう？ならいいけど。」



アルフレッド「いかん……！さっきのお嬢様のおっぱいの
感覚を思い出して、ちんちんが……！そそり立って
しまった！『ピキッ！ピキッ！』」

エラ「んっく！それにしてもいい天気ね♪とても良い
目覚めだわ。」

ゆさっ



アルフレッド「ああ…！ お嬢様の脇が…！丸見えに…！」

エラ「うん？どうしたのアルフレッド？私の脇を見つめ
ちゃって。もしかして誘惑しちゃった？」

アルフレッド「はい！その通りでございます！」

どっつぶ♡

エラ「あら？」

アルフレッド「ぬお！？申し訳ございません！！
お嬢様！！！すぐにお拭き致します！！！」

エラ「待って！アルフレッド！拭かなくていいわ。それ
よりも、一瞬だけ顔になった貴方の巨大なちんぽを
見せてちょうだい？私、そっちが気になるわ♡」



エラ「ねえいいでしょう？もう一度見せてえん♡」

アルフレッド「ああ……！いけませんお嬢様……！前屈みになって、そんなにおっぱいを長くされたら……私もう……！」

だる〜ん



エラ「えいつ♡え〜い♡」

アルフレッド「ぬおおお……！」

エラ「おまたせ♡」

アルフレッド「はあっ……!はあっ……!」【ビキイイイ!】

エラ「うふふっ♡知ってるわ。私が学校行く時、アルフレッドが毎日、服の中でおちんぽテントを張らしている事をね♡」



むちっむちっ

エラ「さてと!今度は私の番よっ!貴方の馬ちんぽ、しゃぶらせてちょうだい♡♡♡」

アルフレッド「いけませんお嬢様……!流石にそれは……!」
「コ―デリア様やマクスウェル様が悲しまれています」

エラ「大丈夫!お母様やお父様には秘密にするからあん♡」

「ズボボボボボボッ……!!」

『屋敷内に奇怪で下品なバキューム音が鳴り響いた。』

アルフレッド「お、お嬢様……! ちんぽが引っこ抜けてしまいます!」

むわ〜

「ズボボボボボボボッ……!!」

『エラの性欲スイッチが完全に入り、アルフレッドの声が聞こえていなかった。』

アルフレッド「もう限界です……!!」



アルフレッド「うぬううー!!」

『アルフレッドは勢い良く射精した。』

【モグオッ!ズボッ!ズボッ!ごっくんっ…!】

どっつぽっつぽ

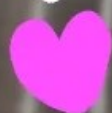
『エラの二心不乱に執事のちんぽをしゃぶり、出された精液を一滴も残さずに飲み干す姿には、ついさっきまでのおしとやかな乙女の面影は何処にも無く、寧ろ永き眠りから目覚めた性欲モンスターのようであった。』

エラ「あっそうですわ。アルフレッド。次はパイズリしてあげますわ」



エラ「はい、ぎゅー♡」

ぶつつつつにゅうううううう



アルフレッド「おおっ……！」

エラ「うふふっ♡気持ちいいみたいですよわね♡
じゃあ動かしますわね♡」

エラ「どうかしら？乳肉を万力のように潰しながらちんぽを扱かれる気分は？乳圧最高でしょう？」



ばっつちゅん



ばっつちゅん



アルフレッド「うぐっ…、素晴らしすぎてもう持ちませぬ…。」

エラ「あら、もうイッてしまうの？効き目が良すぎるみたいね。まあいいわ、存分にこの牛おっぱいに出しなさい♡」

アルフレッド「いきまするー!!」

エラ「わああ♡♡♡すごい量♡♡♡でもまだ力チ力チね。」



エラ「今度は貴方が主導でパイズリしていいですわよ。
このままおまんこしちゃったら精液が余っちゃうでしょ?
だからまずは私の乳肉に思う存分精液をこき捨てなさい♡」

アルフレッド「申し訳ございませぬ。お嬢様のお言葉と
いえど、貴方様のおっぱいを玩具にする事は…」



ぎゅっつっつ

エラ「ダメよ。」

アルフレッド「ああっ!!」

エラ「アルフレッド、貴方がesと言うまでちんぽはこのままロックさせてもらうわ。」

アルフレッド「ううっそれ以前にもう締付がきつ過ぎて…いきまする——！！」

どっぴゅっどっぴゅっ



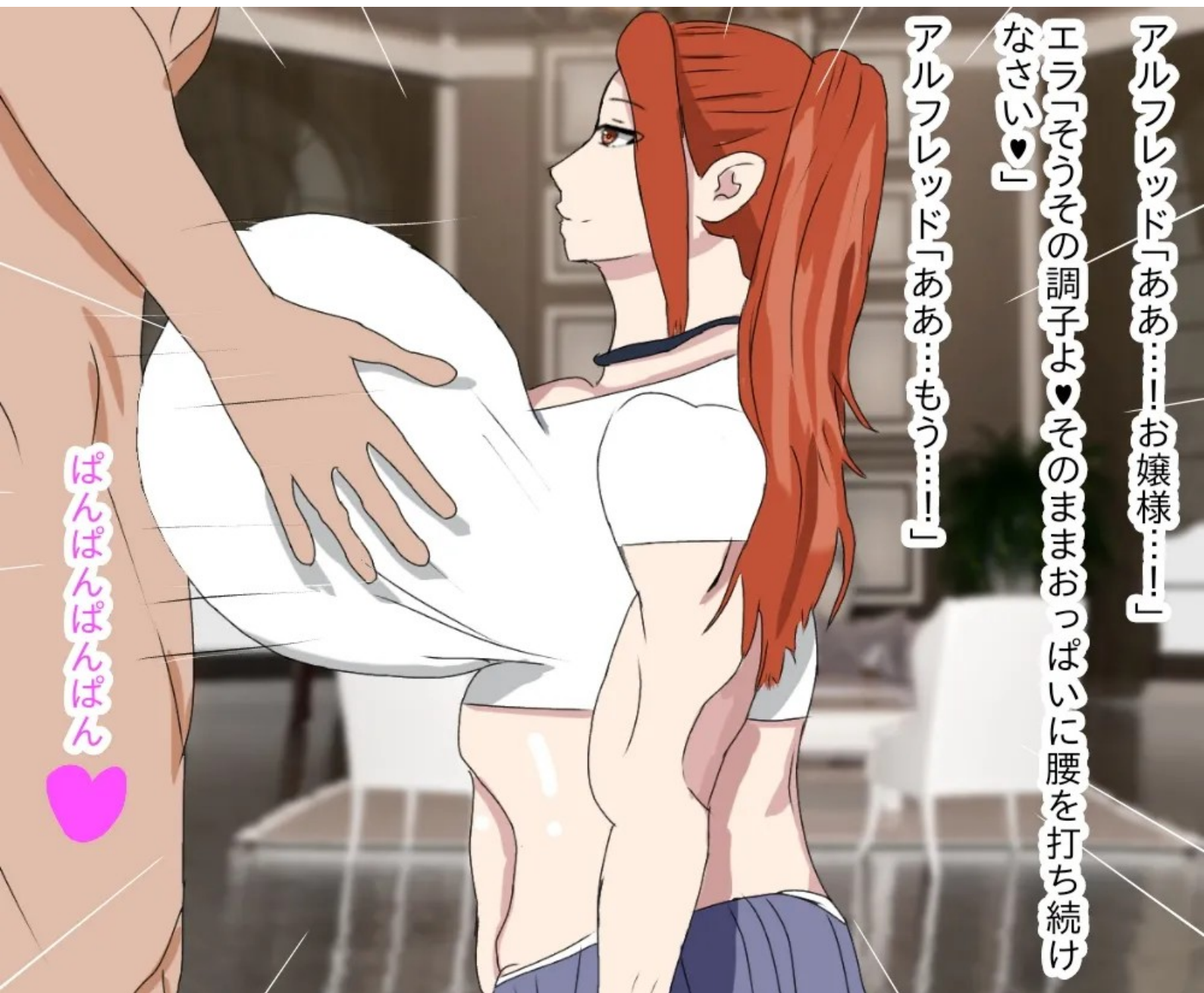
エラ「あら、イツちやったのね♡返事聞く前だったけどまあいいわ。プレイは続行よ♡♡♡」

アルフレッド「ああ…！お嬢様…！」

エラ「そうその調子よ♡そのままおっぱいに腰を打ち続けなさい♡」

アルフレッド「ああ…もう…！」

ぱんぱんぱんぱん



アルフレッド「うぐっ……!!」

エラ「沢山出したばかりなのに、まだ量が多いわね♡
さて、そろそろ頃合いでしょう。今度は私を気持ち良く
させなさい♡」

どっぴゅっ



エラ「おおおおおっ♡♡♡
ちんぽおおおっ♡♡♡」

ぶるんっ



ぶるんっ

エラ「執事ちんぽいいっ♡」

奥までっ…

届いて…

気持ちいいっ♡♡♡」

ぱんぱんぱんぱん



アルフレッド「ああっ…!!お嬢様の中気持ち良過ぎて
いきまする—!!」

エラ「おっ♡おっ♡おっ♡きてえ…♡」



エラ「おおおおおおおおあおおおっ♡♡♡」

じゅっじゅっじゅっじゅっじゅっ

アルフレッド「ああっ!! お嬢様ああああ!!」

[illegible]

エラ「おっ…♡おっ…♡おっ…♡」

ぴくっ

ごぼっ

ぴくっ

アルフレッド「こうして私はエラお嬢様と、
禁断の肉体関係を持てました…」

END

